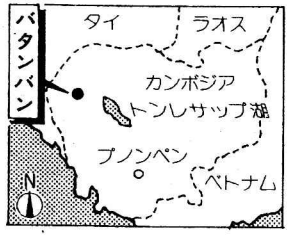
カンボジア難民 帰還を医療支援

アジア医師連絡協 来月から医師派遣

アジア十三カ国の医師で組織する民間の国際協力団体・アジア医師連絡協議会（AMDA）＝本部岡山市楢津、菅波内科医院内＝は九月から、国連が難民の帰還を援助しているカンボジアに医師団を派遣、医療面からカンボジア難民の本国帰還を支援する。

カンボジアは一九七九年以降、内戦状態が続き、数多くの難民が発生。タイには三十三万人以上の難民がいたが、内戦終結に伴い、国連主導で今年三月末から難民の帰還が始まった。

カンボジア難民問題はAMDA設立の契機。一九七九年、同会の菅波茂代表（四五）が二人の医学生とともに内戦で負傷者や病人が急増しているカンボジアを援助しようと現地入りしたが、協力団体がなく、支援できずに帰国。アジア諸国の医師の連携の必要性を痛感し、五年後にAMDAを設立した。



AMDAは今年二月から四月にかけ二人の医師を事前調査のためカンボジアに派遣。現地の疾病状況のほか、病院、医療器具など医療体制の整備状況を調べた。調査によると、長年の内戦のためカンボジア国内では難民の生活基盤は整っておらず、上下水道などの衛生環境もひどく、チフスなどの伝染病患者もみられた。また医師や看護婦も大幅に不足しており、難民の帰還で医療活動が深刻化するとみられる。

事態を重くみたAMDAは「カンボジア帰還難民救援プロジェクト」を計画。山形大精神神経科の桑山紀彦医師（三〇）が九月四日に現地入りした後、現在、英国・ロンドン大学大学院に留学している高橋央医師（三〇）＝熱帯医学＝を同月下旬、カンボジア北西部のバタンバン市に派遣する。高橋医師は約一年間、国連がバタンバン市に設けた一時受け入れ施設に滞在。AMDAタイ支部が医薬品供給など行い、タイ国境からカンボジアに帰還する難民を対象にはしか、ポリオなど伝染病の予防接種、衛生教育などを行う。また九月以降、数次にわたってAMDA日本支部、同インド支部など三、四カ国から短期応援の医師を派遣する予定。

菅波代表は「カンボジア難民問題はAMDAの原点。十数年前に援助できなかった人々に、今回こそ医療を通じ国際貢献していきたい」と話している。